

総合学科における工業科目（デザイン）のあり方

－ 多様化する生徒の進路希望を満たすために －

愛知県立岩倉総合高等学校

アート・デザイン系列 堀 薫

1 はじめに

本校の総合学科におけるデザイン系列の選択科目は、工業科（デザイン）・芸術科（美術）・商業科・家庭科の科目で構成されている。工業科目としては、デザイン技術・デザイン材料・デザイン史・プロダクトデザイン・製図・コンピュータ製図・陶芸・木材工芸がある。開校当時は、美術系私立大学・専門学校へ進学を希望する生徒が多かったので、幅広く実用的なデザインを学べるような科目が設定がされていた。しかし、生徒の実技の力をさらに磨き、進路希望も美術系の難関大学へと高い目標を目指すことを可能にするため、設定科目や授業の内容をレベルの高い実技試験に対応するための様々な工夫が必要となった。

しかし、工業科の科目のみでは指導に限界があり、デッサンや平面構成、水彩画や油彩画などの実技試験対応の授業内容にすることは難しい。そこで、美術科目である、基礎造形・アート演習（ビジュアルデザインを科目名変更）・素描・美術史を進学用の実技対策科目として充実させることとし、それらを美術系大学・専門学校への進学希望生徒にとっての必須選択科目とした。また、愛知県立芸術大学等を希望する場合は、センター試験対策のための科目選択が必要となるため、工業科目を選択することができなくなってしまった。

現在では、工業科目を選択する生徒は、就職・専門（理美容、調理関係、動物関係など美術系以外）・普通大学へ進路を希望しているが、進路実現のための科目選択には比較的余裕のある生徒であるというのが実情である。「おもしろそうだから」が、彼らの選択理由であるが、一部、デザインの専門的な授業内容では落ちこぼれる生徒が出るという問題に直面した。

このように、将来、デザインとはほぼ無関係の進路へ進む生徒に、少しでも「ものづくり」の楽しさを伝えるには、どのような魅力ある授業を展開すればよいか。また、直接進路とは関係の無い科目を選択した生徒たちにとって、その授業が、将来少しでも役に立つ経験になるためには何が必要かを考えた取り組みを、「木材工芸」という授業の中で紹介する。

2 ねらい

従来の授業では、共通のテーマで、同じ作品を製作させていたが、それぞれの個性・能力に合わせ、同時に本人の「つくりたい」という気持ちを尊重するために、与えられたテーマではなく、自ら考えたテーマに基づいて作品を製作させる。そして、その製作を通して自ら考え、課題を探し解決する態度を育成するとともに、コンセプトの作成からプレゼンテーションを通してコミュニケーション能力を育成する。

3 実践内容（木材工芸）

(1) ねらい

「自分で作る、自分だけの家具」をテーマに、「あったらいいな」、「欲しいな」を追求し、自由に考えさせる。

(2) 展開

絵を描くことが苦手な生徒が多いため、アイデアスケッチ、完成予想図、三面図にかかる時間を最小限にし、アイデアスケッチの代わりに段ボールを使ったり、作りやすい縮尺で立体のモデル作成をするなど、製作そのものを楽しめるような作業時間の配分を行った。

(3) 発表

作品のコンセプトを説明するシートを作成し参加者に配布して、完成作品を紹介しながら、3分間のプレゼンテーションを行う。

(4) 評価の方法

ア 指導者による評価（講評）

イ 自己評価（感想文）

ウ 生徒同士による評価（作品の完成度、コンセプトの内容、プレゼンテーション時の出来栄

えを5段階評価で行う）。

4 おわりに

与えられた課題で製作させていた時は、作品を持ち帰らず放置する生徒が目立ったが、自分で使用するものやあったらいいなと思うものを製作することによって、出来た作品は必ず持ち帰るようになった。生徒によっては、家族に作って欲しいものを頼まれたり、誕生日のプレゼントを製作するようになったりすると、作るもののコンセプトが明確になり、製作意図をしっかりと伝えられるようになってきた。作っている作品の向こう側にいる相手の存在を意識することで、作品に対する妥協が減り、塗装や仕上げ磨きに時間をかけるようになった。完成度が上がった作品には自ずと愛着がわき、大切にできるようになる。相手に喜んでもらうことによって、ものづくりの楽しさという原点を味合うことができるようになった。楽しく作業しているときは、何度失敗しても作り直すことへの抵抗は少ない。この経験が自信となり、その自信は堂々とプレゼンテーションする態度にも表れるようになってきた。

今、工業科目を選択してくる生徒たちは、デザイン系列の科目はもとより、美術さえ選択してきていないが、子どもの頃、ものづくりは好きだったという生徒は多い。絵を描いたり、ものを作ったりすることは、成績や受験に関係ないということでやめてしまったのかもしれない。将来お金にならないとか、やったことがないことは失敗するからやめなさいという言葉で、好きなことを諦めたのかもしれない。好きで夢中になれることは何度失敗しても楽しい。好きなことを押さえられてきた子どもは、失敗することも減ってしまったのではないか。夢中で好きなことをしている中での失敗経験が自信になる。欲しいものを作り、夢中で好きなものを作り、何度も失敗し、やり直すことを楽しむことが出来るまでになることが、生きる力を育むことになるのではないだろうか。子どもの頃には、夢中になれることをつくるのが大切である。大人にとってくだらないと思えることでも、夢中になっている子どもの芽を摘まないよう心がけたい。

5 製作作品

CD ラック



アクセサリースタンド



小物入れ



スリッパスタンド



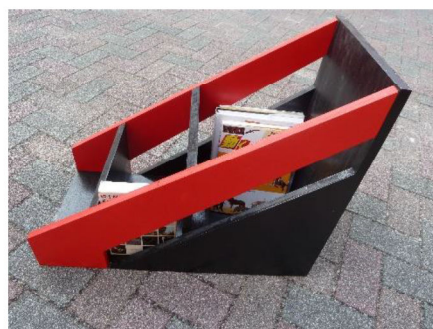
収納ボックス



子供用収納ボックス



マガジンラック



マガジンラック



ブックスタンド

